

# ゆとり



村田修子

「ゆとりのある生活」「ゆとりのある○○」というように、最近こういったことが耳に入りますし、紙面にもよくあらわれてきます。

教育の世界にも「ゆとり」が叫ばれ、つめ込み教育できゆうきゆうとしている現状を考えなければならぬときになっています。

「ゆとりと充実をめざす教育」を試みとして実践している数校（多くは小学校）について、その動機をみますと、大体共通しているようです。

●このままでは豊かな人間性が育てられない、という実感

●指導内容が多過ぎる上に、知的偏重を強いられる社会的条件が多過ぎる、という認識

●学校という集団の中で、ひとりひとりの能力や個性に合った教育を、いっそう強化徹底する必要があるという認識

●児童の総合能力を育てたいという願い

●実践力を身につけたいという願い

●児童と共に教師も成長したいという願い

など、つまり「豊かな人間性陶冶の場としての学校を築きたい」ということにはかならないのでしょうか。

具体的には「生活の日」とか「総合活動」「創造活動

の時間」などのテーマを設けて、

- 行動による人間力の育成を目指す
- ひとりひとりの力を伸ばす学習指導に力を入れる
- 人間性豊かに生き抜く、健康で自主、連帯、創造性豊かなたくましい子どもを育て上げる

などを目標としています。

以上あげてきたことがらを見ても感じますし、また今回の五五年度から順次実施される、小・中・高校の教育課程の改訂についての解説を聞いても思いますが、幼児の仕事にたずさわっていた者が常に目指していたのと同じ方向、同じものの考え方になつてきたように思います。よく考えてみますと今迄あゆんできた道が異常で、や々と人間本来の、目指すべき道に戻ってきたと思います。ですからこれ自体はとても喜ばしいのですが、問題なのは実践なのですから、もし小学校の先生が、幼稚園と同じようになったことは程度が低くなったのだ、とでも思うのであれば、もうなにかいわんや、です。

これについてはひとことではありません。幼児に接している人たちの中にも幼児を忘れ、また幼児にとって大切な「ゆとり」を忘れていないでしょうか。

いつもきゆうきゆうとして子どもたちを思うように引き回すことはかりをめざして、子どもが自分で考えたり表現するひまを与えないことを、充実している、とか、それが熱心さである、と思つてはいないでしょうか。

最近、つめ込み勉強に追われてゆとりのない学生生活をへて社会に出て、一人前の教師として立った人と話しかけたときに、驚くような立派なことをいう反面、どこかに社会的には一向に成長していないバランスの悪さが感じられて大変驚きました。それと同時に、その人によってみちびかれる子どもたちに思いをはせ、危機感をも覚えしました。

この経験から、教育の基本方針が「ゆとり」の方向にむいてきたことを喜んでいいものです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)